

山科本願寺跡 発掘調査現地説明会資料

2005年2月20日

所在地：京都市山科区西野左義長町13-2

調査面積：約200m²

調査期間：2005年1月25日～継続中

調査主体：財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

はじめに

山科本願寺は、寺院を中核とした城塞都市で、文明10年（1478）に蓮如上人によって造営が始められ、同15年にはその主要な施設が完成している。その後、寺内町の経済的發展に支えられ大いに繁栄したが、半世紀後の天文元年（1532）8月、細川晴元率いる法華宗徒・近江守護六角氏等の連合軍に攻撃され焼け落ちた。

寺域は「御本寺」、「内寺内」、「外寺内」の三つの郭から構成され、外周には土を高く積み上げた土塁や堀を巡らせた防御施設を備えていた。その規模は南北1km、東西0.8kmにおよぶと推定されており、現在でも土塁や堀の一部が遺存している。これまでに蓮如の隠居所である「南殿」の一画と土塁の一部が国史跡に指定されている。

発見した遺構

今回の調査地は山科本願寺の中心部である「御本寺」の南西部に推定されている地点である。ここで大規模な堀や柵列を検出した。

堀8 東西方向の堀で幅約3.0m、深さ2.1mである。堀の断面形状は逆台形である。

堀9 南北方向の堀で造り替えが認められる。当初は幅約2.4m、深さ2.1mで、断面形状はU字形（現状）である。後に幅約1.8m、深さ1.2mで断面形状V字形のいわゆる薬研堀に掘りかえている。

堀51 斜め方向の堀で幅約2.4m、深さ1.9m、北西部は堀8に合流する。南東部は調査区の南東隅で東方向に向きを変え調査区外へ延びている。

柵列22 東西方向の柵列で、柱間は3.0m前後である。柱穴には直径0.2m前後の石を据えているものもある。

まとめ

今回の調査では、山科本願寺に関する大規模な堀を確認した。これらの堀は寺内町の中心部分である「御本寺」の内部をさらに細分する施設と考えられる。また、堀の断面形状はU字あるいはV字形をして深く、防御的な性格が強いものと考えられる。

また、調査では標高39.2m前後で遺構を検出した。当地の南側で実施した1997年～2000年の調査区（標高38.0m前後）よりも約1.2m程度高いことがわかった。このあたりは北西から南東方向に傾斜した地形であり、山科本願寺造営に際しては高い部分を削り、低い部分に埋め立てるなどして、ひな壇状に造成している様子がうかがえる。

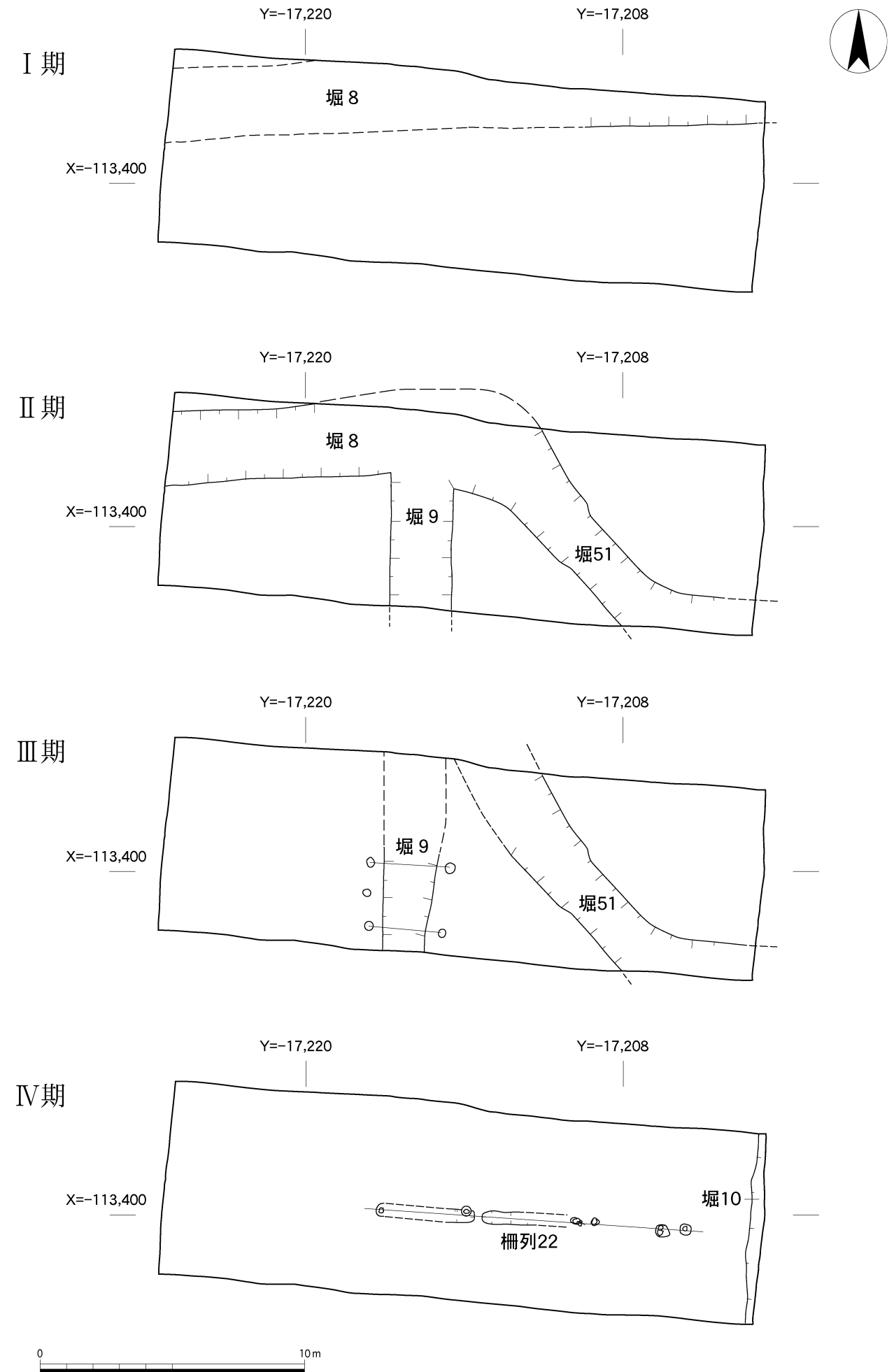


図1 遺構変遷図（1：200）

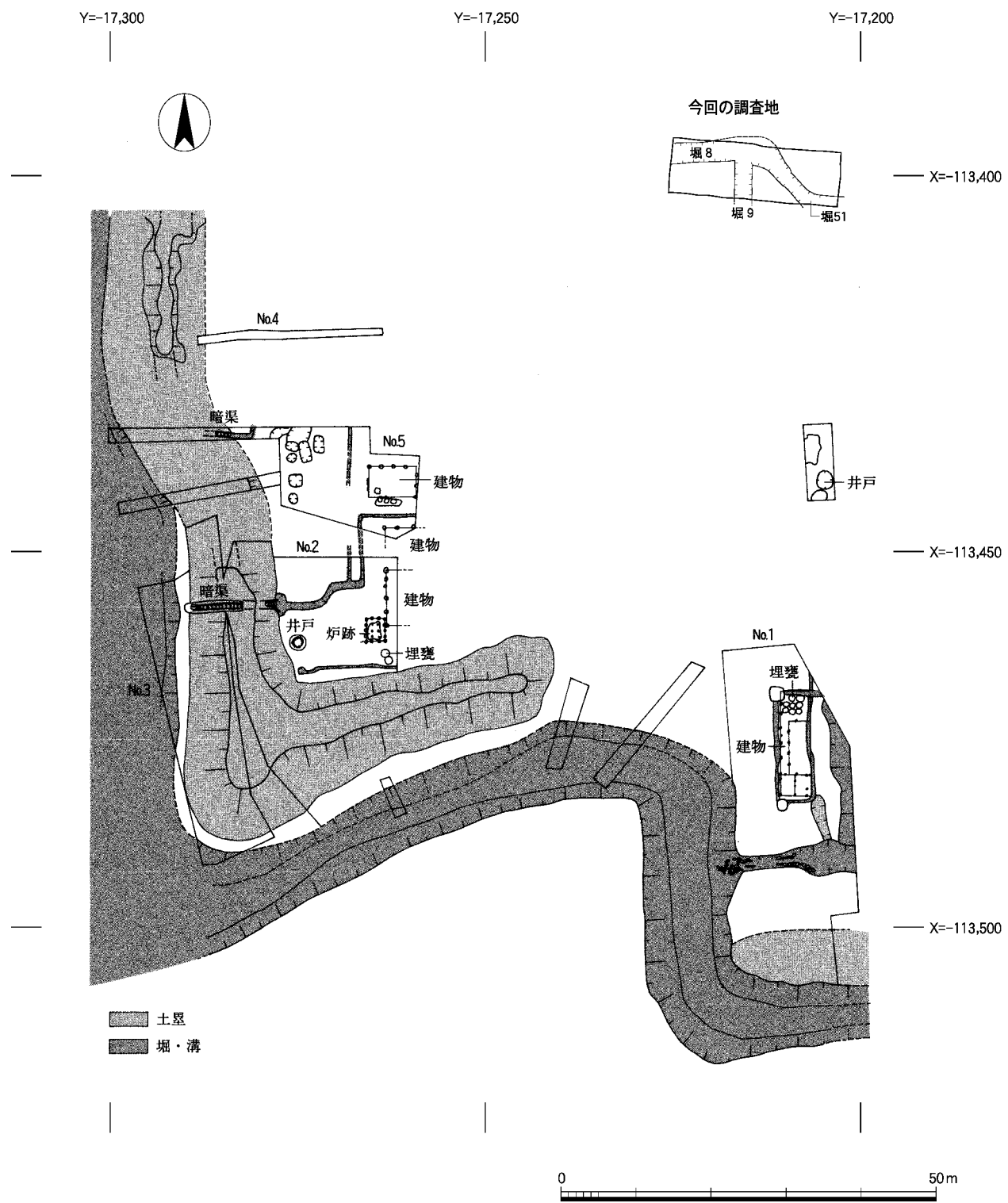


図2 周辺の調査状況 (1:800)



図3 山科本願寺跡 (南から 1997年撮影)